

ても雪が降っても、子どもが遊びに困るようすはまったく見られません。風が吹けば吹くように、雪が降れば降るように、子どもたちは遊びを造り出します。ほんとうに子どもは遊びの天才ですね。大人が寒さと白魔に気圧されて、陰うつな顔をしながら逼塞<sup>ひつそく</sup>している冬が、子どもにとっては新しい遊びとの出会いを経験するゾクゾクするような興奮の季節なのです。

二月、といえはもう春の気配が感じられる、というのは暖地でのこと。雪国ではまだまだ冬將軍の強力な支配がゆるみません。雪をかきわけて山中にクマを求める猟師の話では、牝グマ

## 冬の自然

加藤 幸子



北風が吹き初めるころになると、武蔵野のはずれにある薬用植物園からは、富士山を中心に丹沢山塊や奥多摩の山々が見えるようになります。夕焼けの空に、山波がシルエットとなつて浮かび出すころは、特に美しく、思わず、帰宅の足を止めて、見とれてしまいます。冬といえは、この夕暮の風景がまず、心

は穴ごもりをしている間に出産をするそうです。この厳寒期のきびしい条件のもとで子グマを生み、そして雪解けとともに子グマを連れて山野を歩きはじめるのだそうです。そんな話をふと思い出して、いまは赤ちゃんグマがまだお乳を含んでいるころだろうか、それとももう、ころころと遊びはじめたかななどと想像しながら、雪の中を小犬か小グマのように夢中になってはしゃぎまわっている子どもたちを見えていますと、雪国の子どもたちもつとも成長するのは、もしかしたら冬の間ではないかしら、と思ったりもしています。(福島・わかきさ幼稚園)

に浮かんでいきます。しかし、夕暮の華やかさとは反対に、晩秋から初冬にかけては、植物を扱っている者にとって、何ともわびしい季節なのです。初霜が降りて、南方系の植物が、夏の残り花をつけたまま、一夜にして枯れはててしまうのもこの頃です。梢に残った数枚の葉が北風にくるくる舞うころは、枯れた草や枝を集めてたきながら、いよいよ本格的な冬だと感じます。植物園を訪れる人も少なくなり、ひっそり閑として、私たちも一年間のたまった事務仕事を片づけながら、ひたすら春が来るのを待っています。

しかし、同じ冬とは言っても、年が明けると、あの初冬のわびしさはどこへやら、なんとなく陽気になってくるのは、春に向かって活動を始めている植物に出会うからでしょうか。

一月から二月にかけては、暦の上でも大寒で、寒さも一段ときびしいころです。日陰では、地面が凍りついて一日中溶けず、掘りかえそうとして苦労したことがあります。

道端では、ヒメジオンやタンポポが霜で焼けて茶色になりながらも、弱い太陽の光を少しでも多く受けるようにと、根生葉を地面にはりつけて生きています。そんな頃でも、落葉をかきわけると、地面のすぐ下まで、チューリップの芽がのびていて、そのたくましさに驚かされます。暖かい日が何日か続いたとき、落葉をガサゴサ踏みながら、雑木林を歩きまわるのも、冬ならではの楽しみです。落葉の下で、秋に落ちたドングリ（コナラとクヌギの実）が芽を出していたり、コブシの冬芽が、いまにも動き出しそうに大きくなっているのを見つけたります。

また、こんな冬のさなかでも花をつけるものがあります。マンサクやスイセンです。薬用植物園の花ごよみによれば、マンサクは一月中旬に、スイセンは下旬にはもう花を開いています。マンサクはもともと山にはえる低木ですが、生け花の素材

として、花屋の店先にも出回っています。遠くから見ると、枯れ枝がわずかに黄色に色づいているようで、それが花だとわかったときは、「この季節に」と驚きました。若くして亡くなった友だちが、その遺稿の中で、巻機山の残雪の中で咲くマンサクのことを書いていました。彼は新潟の人でしたが、雪国の人にとって、雪の上に顔を出して、春一番に咲くこの花は、感慨深いものなのでしょう。マンサクの語源も、春、まず咲く「マズサク」から来ているという説もあります。

春は、冬が長くきびしいほど待ち遠しく、うれしいものだろうで、北国の人ほど、春の訪れに敏感なのではないでしょう。東京に住んでいる私たちは、真冬でも、温室育ちや暖地育ちのチューリップやストックなどの花を飾り、暖かい部屋でぬくぬく暮らしているので、冬から春に向かって活動をはじめている戸外の植物には気づかず過ぎていくようです。

植物たちは、私たちが気づかなくても、二月も下旬になれば、道端でひたすら冬を耐えていた霜枯れのヒメジオン、スズメノカタビラ、タンポポなどの春の草が、緑を盛り返し、陽だまりをつけ初め、春の前奏曲をかなでているのです。

（東京都立薬用植物園）